
フィレンツェ、ポッジョ・インペリアーレ離宮の内部装飾の図像解釈

太田智子(フィレンツェ大学大学院修了)

第四代トスカーナ大公メディチ家のコジモ2世(1590-1621年、在位1609-21年)の妃であるオーストリア家のマリア・マッダレーナ(1589-1631年)は、夫の早世後、大公位を継いだ未成年の長男フェルディナンド2世(1610-70年、在位1621-70年)の摂政となった時期に、フィレンツェ近郊に位置する「バロンチェッリ家のヴィッラ」を購入し改築させた。本発表では、この時、1623年から1624年にかけて、マッテオ・ロッセッリ(1578-1650年)を中心とする17世紀フィレンツェ派を代表する画家集団により実施された内部装飾事業について取り上げ、その装飾プログラムに新たな解釈を提示する。改装が完成した暁に、大公妃はこれを「ポッジョ・インペリアーレ離宮(Villa di Poggio Imperiale)」と命名した。

17世紀フィレンツェ絵画の代表的作例でありながら、離宮の装飾に携わった画家への支払記録や、装飾計画の図像考案者の特定を可能とするような史料は現在に至るまで発見されていない。そのため、必然的に制作者を特定することが研究者達の主な関心事となり、主に様式的観点から研究が展開されてきた。2000年以降の研究においては、これらの図像の文学的典拠として、ヤコブス・デ・ウォラギネの『黄金伝説』のほかに、離宮装飾と同時代に書かれ、まさしく大公妃マリア・マッダレーナに献呈された二点の著作物、すなわち、ドミニコ会説教師ニコロ・ロリーニ・デル・モンテ著『教会暦とローマ殉教録の主要な処女聖人、殉教聖女、その他聖女への礼賛』(1617年)と、クリストファノ・ブロンズイーニ・ダンコーナ著『女性の尊厳と高貴さに関する対話』(1622-25年)が提案されてきた。しかしながら、これらのテキストの記述とフレスコ画に表された場面を逐一検討してみるならば、必ずしも照合しないことが判明する。したがって、本発表では、「謁見の大広間」および「大公妃の寝室」を飾る全20点のリネット装飾のなかから5点に絞って詳細な図像学的検討を行い、既出のテキストのほかに、装飾計画を考案する上で参照された可能性のある文学的典拠および図像源を新たに提起する。その上で、装飾計画全体が有した意味を同時代の文脈から再検討することにより、このフレスコ画連作は、女性摂政率いるトスカーナ大公国の新政府の立場を視覚的に表明するものであり、特に最も重要な懸案事項であった新教皇ウルバヌス8世支持の表明、聖遺物発見というエピソードに象徴される聖遺物崇拝を正統としたカトリック信仰の表明、そして兄である皇帝フェルディナント2世とともに異教徒およびプロテスタントと対峙する決意という三点に集約されるものであったことを明らかにする。